

国際生物多様性の日記念シンポジウム
「里地里山の生物多様性
- 農業と森林を繋ぐ -」

シンポジウムレポート

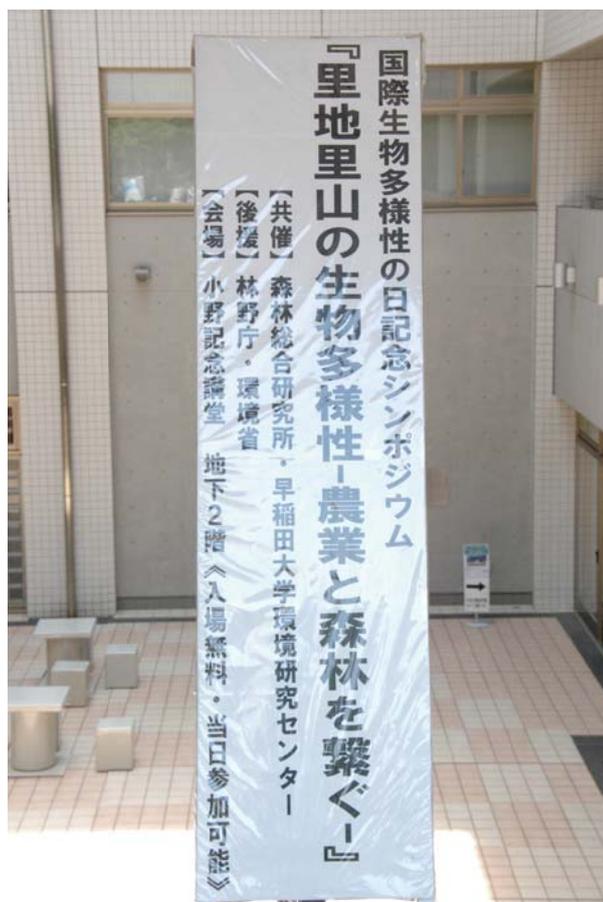


2008年5月22日（木）

早稲田大学小野記念講堂

主催：森林総合研究所・早稲田大学環境総合研究センター

後援：林野庁・環境省



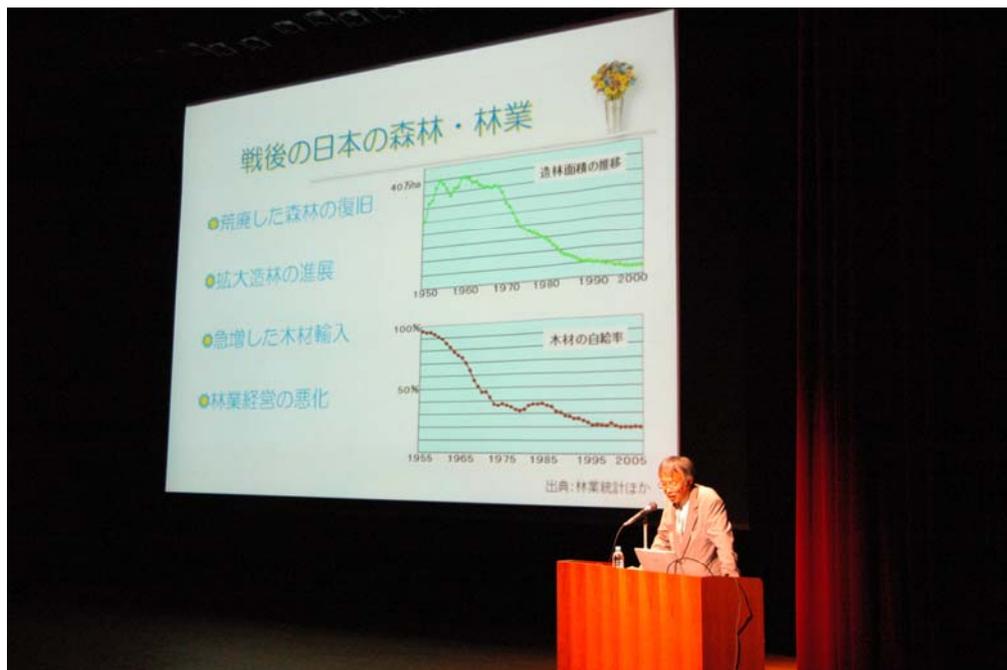
独立行政法人森林総合研究所主催・早稲田大学環境総合研究センター共催の国際生物多様性の日記念シンポジウムは、好天の中、早稲田大学小野記念講堂において開催されました。



受付を済ませた参加者は、まずポスター会場で、森林総合研究所、農業環境技術研究所によるポスター発表を聞き、意見交換を行いました。



シンポジウムは大河内勇生物多様性担当コーディネータの司会の元、鈴木和夫森林総研理事長挨拶から始まり、福山研二国際研究担当コーディネータの趣旨説明へと続きました。



トップバッターの佐野真琴博士（森林総合研究所）は、森林の生物多様性が森林タイプや林齢に反応するという基礎的な研究を元に生物多様性を予測し、地図化することに成功した研究成果について講演しました。



次に前籐薫博士（神戸大学）は海外の研究成果を交えながら、森林の生物が提供する生態系サービスを農業で利用してゆくためには、従来の里山に見られたような人間の活動が重要であることを示しました。



- I. 生物多様性を社会に浸透させる
 - ① 地方・企業・NGO・国民の多様な参加を促す「いもものにざわいプロジェクト」の展開
 - ② 放課後の自然体験学習や「五感で感じる」野外観察
- II. 地域における人と自然の関係を再構築する
 - ① 「未来に引き継ぎたい里山地産山」の選定と共有資源としての管理モデル構築
 - ② 農産と多岐に分けられる地域作りと若い世代育成
 - ③ 生物多様性の保全に貢献する農林水産物の推進
 - ④ 希少動植物の生息できる空間づくりと自然環境の回復



高橋佳孝博士（近畿中国四国農業研究センター）はご自身の研究成果にNPOの活動を交え、草原や湿地という生態系が里山における人間活動の変化や低下によって失われつつあり、里山の生物多様性保全に重大な影響を及ぼしていることを訴えました。



最後に、栗山浩一博士（早稲田大学）による生物多様性と環境経済学についての講演が行われ、これまでの研究事例を元に、国民の森林に期待が多様化していること、受益者の範囲は拡大していること、今日ではより多くの方が生物多様性に対して経済価値を認めていることが示されました。



早稲田大学環境総合研究センターの森川靖教授のとりまとめの講演のあと、パネルディスカッションが行われ、活発に意見を交換しました。
参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。